



善誘館小

校長室だより6月

文責 善誘館小
校長 弦間 文

潔さと成長

最近、他県の校長先生方と話す機会がありました。その話の内容は、学級崩壊してしまうクラスがいまだにある、という内容です。本校は保護者の皆様のご協力のおかげで崩壊するクラスはありませんが、他の地域には授業が成立しないクラスや集団として高まることの出来ないクラスが少なからずあるようです。

集団の崩壊と熟成

崩壊に向かうクラスや組織・集団は、どこも同じような雰囲気があります。

- 権利は強く主張するが、義務は果たさない。
- 相手の非は強く批判するが、自分の非は認めない。
- 他人には非常に厳しいが、自分には甘い。
- 他人のあら探しは敏感だが、自身の欠点探しは鈍感。

要するに、常に「他人」に意識が向いていて、「自分」に意識が向いていないということです。崩壊している組織の住人に多いのが、自己を省みる「自己反省」という意識がないことです。反省は悪に進む己が心を食い止める力となるのに、それがいないため、自己を磨くとか、高めるという意識が育たず、常に周りのせいにして、自分の思い通りにならないからイライラし、そこに争い事が増え、集団として機能しなくなります。集団として機能している組織というのは、お互いに支え合い、それぞれが役割や責任を果たしていくことで、集団と個人が高まっていきます。支え合う集団は一人一人の意識が常に「自分」に向いていて、自分自身への要求が高くなるので、周りからの助けが入ったときに、敏感に察知し、そこに「感謝」が生まれます。感謝の心は恩に報い、積極的に善を働く力となるので、さらに「支えよう」・「役に立とう」となります。人は人格が高くなればなるほど、人の気がつかないような所にまで気がついて感謝が出来るようになるものです。

担任時代の思い出

担任時代、ある学校で受け持たせていただいた中学年のクラスは、すでにクラスが崩壊状態に近く、争いごとの数は他のクラスの比ではなく、学び愛高め会える状態ではありませんでした。受け持っていてやや落ち着いてきた頃、それまでのクラスの様子を全体場で子供たちに聞くと「○○さんが叩いた」「○○さんが『死ね!』と言った」「○○さんが唾をかけた」等々相手の非を責めるひどい発言ばかりでした。

そこで「立派な人になるために、まだ言い忘れていることがありますよ。」と言って黒板に「いさぎよさ」と……書いて、子供たちといっしょに読みました。そして「昔から日本人は『潔さ』を身につける心を持っていて、自分の犯した罪も、正直に認めて反省し、立派な人になろうとしました。今の皆さんは、友達の悪いことは言うけど、自分がしてしまった悪いことを潔く言った人は誰もいませんでした。とても残念です。」と言ったら、そこは素直な子供たちですから今度は一斉に「ぼくが○○さんを蹴飛ばしてしまいました。ごめんなさい。」「いいよ。」「私は○○さんにバカと言ってしまいました。ごめんなさい。」「いいよ。」という具合に、そこから、「自分」に意識を向けるという精神文化の構築に努め、さらに高め合える集団となりました。

子供の特長

子供は、未熟だから子供です。大人より未熟だから、大人よりたくさん人に迷惑をかけます。失敗もするし、人も傷つけます。時には大人より残酷であったり大人より嘘をついたりします。それらが「悪いことだ」ということは、友だちや大人と関わりながら、さまざまな感情に触れる体験を通してわかるものです。だから子供には成長過程で正しく導くための教育が必要です。自己反省を繰り返し、人の心

が作り上げる「世の中」、という世界で幸せに生きていくために大切なことを学ぶ場所、それが学校です。

しかし子供の特性として強烈に「親や先生に愛されたい」「親や先生に叱られたくない」という気持ちがあります。愛されたいから、潔く非を認めることを恐れます。さらに保護者同士の結びつきが希薄な地域だと、トラブルが発生したとき、子供はそれを察知して、自分の正当性を主張し、親に怒られないようにしたり迷惑をかけたりしないようにします。そして保護者同士が子供の言うままに、正当性を主張し合い、大きなトラブルに発展したというケースを何度も聞いたことがあります。

教室は高めるための場所

それらも含め教室の中に、潔く自分の非を認めるという規範がないと崩壊してまいります。なぜなら仲直りは自分の非を潔くめ、反省し謝るところから始まるからです。喧嘩はよいことではありませんが、喧嘩して仲直りするのには、自分が高まるためのよい勉強です。教室は高めるための場所であって裁判所ではありません。今や日本は、潔く非を認めると「損」をする、だからトラブルが発生したら、とにかく自分を正当化して生きていくことに「得」だ、となりつつあるような気がしてなりません。

理想があつてこそ反省が生きる

潔く自分の非を認めて、自己の成長の糧にする。それは人間にとって永遠のテーマであり、まさに修行です。完璧ではない人間が、叱られるとか裁かれる試練を覚悟して、自分を高めるために、自分を正当化しようとする防衛本能と戦わなくてはならないからです。その試練を乗り越えるには、愛されているという自信が必要です。たとえ人前で自己の非をさらけ出すことはできなくても、せめて自分の心の中に「潔さ」があることが大切ではないでしょうか。

「潔さを持つこと」、それはひとにもとめるものではなく、自分自身に求めるものです。「『潔く自己を省みる』と『自分自身の人間性を高めるための理想をもつ』」というのはワンセットです。高い理想があつてこそ、「失敗は成功のもと」として、成長に生かせるのです。子供たちが世の中に出た時、修行不足で稚拙な失敗ばかりして、自分の隠れ蓑を探すような小さな生き方をするのではなく、潔く堂々として人生の王道を歩み、遠い将来、多くの人に尊敬され、慕われる人物となれるよう、新たな時代のスタートにご家庭でも語り合ってみてはいかがでしょうか。